

倫理的購入・CSR調達ガイドライン 第2回研究会

エシカルライフのすすめ
— 持続可能な企業評価の国際基準を —

2012(平成24)/07/05

嶋矢志郎

はじめにー3.11の教訓/文明シフトへの啓示

■3.11の教訓

- ①地球とは何か、自然とは何か、環境とは何か。
- ②人間とはいかに無知蒙昧で、矮小な存在か。科学技術も近代文明もいかに脆く、未熟で、儂い戯事か。
- ③地球環境が与えてくれる無償の優しさ、豊かで、瑞々しい天与の自然からの恵みこそ、私たちのいのちをつなぎ、暮らしを支えている命綱であり、生存基盤であること。

■文明シフトへの啓示

- ①人間本位の対峙型自然観に基づく物質文明、とりわけ西欧型の進歩史観に基づく近代物質文明から生態系(いのち)本位の融合型自然観に基づく共生文明へ。
- ②3.11は今こそ、近代物質文明を抑制、制御して、共生文明へのシフトを促した天の声、神の啓示である。
- ③文明の作法を、自然を畏れ、敬い、倣い、随い、寄り添って、融け合いながら、暮らし、生きていく共生文明へ、文明シフトを急ぐ必要がある。

1. 今、なぜ「エシカルライフのすすめ」か

■エシカルとは何か/「良心」に問うもの

- ① Ethic/Ethical ・倫理的な/道德上の
 - ・(社会規範に照らして)正しい。
- ② 私流の意識 ・良心的、良心に叶う、良心に恥じない、良心の呵責に耐え得る。
- ③ 倫理/道德 客観、3人称、第3者からの規範ありき、他律的。
良心 主観、1人称、自らのSelf-check、自律的。

■「人の営み」を律する第3の行動指針へ

- ① 人間の意識と行動の動機には、2つある。
 - 第1の行動指針 主体的な「欲望」
 - 第2の行動指針 他者からの「命令」
- ② 今や第1でも、第2でもない。第3の行動指針が求められている。それが、「エシカル、良心」。
「欲望」を自律的に抑制、制御する行動指針。
- ③ 良心 (Conscience)とは
より人間らしく生きるための心と精神の拠りどころ。その深奥に宿る「清く、正しく、美しく」
生き抜こうとするもう一人の自分。

■ エシカルライフのすすめ/3つの目標

①目標その1

エコ認識を「人間本位の浅いエコ」から「生態系(いのち)本位の深いエコ」へ、切り換えていくこと。

*1973年、アルネ・ネス(1912-2009)の論文『The Shallow & the Deep』が初出。

②目標その2

近代物質文明の陰で失ってきた感性の劣化をはじめ、人間性の喪失など、一連の「近代化の忘れもの」を取り戻すため、エシカルマインド/良心的な心と精神を醸成していくこと。

*レイチェル・カーソン(1907-1964)の遺作『センス・オブ・ワンダー』の警鐘。

③目標その3

地球上のあらゆるアクターは、生活者・消費者として、生産者/供給者としても、地域住民や地球市民としても、人としてのすべての営みを生態系の一員として良心に恥じないエシカル指向へ切り替え、エシカルライフに徹していくこと。

*「持続可能な開発、発展」を実現するグリーン経済を目指していくには、グリーン成長の成果を多種多様な地球的問題群の課題解決へ、あらゆる偏在と格差の是正へ傾斜配分していく必要がある。

地球と人類が直面している危機を救うため、私たち一人ひとりがこれらの問題意識と自覚を共有し、これら3つの目標達成へ、積極的に参加、貢献の必要。

2. 文明とその作法/物欲から「良心の世紀」へ

文明とその作法/20世紀型から21世紀型へ

「浅いエコ」の20世紀型	比較対象	「深いエコ」の21世紀型
人間本位のShallow Ecology	生態系/エコ認識	生態系(いのち)本位のDeep Ecology
自然と対峙/支配、搾取する	自然観	自然と融合/敬い、共生する
無限で、劣化しない地球環境	地球/環境観	有限で、劣化する地球環境
再生不可能な 枯渇型化石燃料依存	Energy源	再生可能な 循環型自然Energy依存
多消費/高燃費の浪費型	資源/Energyの使い方	省資源/低燃費の節約型
少品種/大量生産	生産体制	多品種/適量生産
Global化/遠距離大量輸送	流通体制	Local化/近距離地産地消
使い捨て文化	生活様式	足るを知る文化
物の豊かさ/もっともっと病	欲求構造	心の豊かさ/生活の質
収入/学歴/地位の3高	生き甲斐	自己実現

■ 生きている地球/その可能性と限界

① LPI (Living Planet Index: 生きている地球指標) の急低下。

* 地球環境の供給力/再生産力/扶養力の急速な劣化 1970(100)→2007(70) 30ポイント減。

② EFP (Ecological Foot-Print: 地球への負荷の足跡) の急膨張。

* 人類の消費/需要が地球環境に与えている負荷尺度 (地球の個数で表示)

- 2003年当時 地球の1.25個分。
- 2007年当時 地球の1.50個分
- 日本並み消費 地球の2.5倍分。
- 米国並み消費 地球の4.5個分

③ 地球環境の可能性と限界

* マクロ計算によると、地球環境の扶養力は約100億人分であるが、現実には主に流通と価格の2つの壁で、慢性的な供給不足、偏在と格差が拡大。

* 2050年の90億人超を誰が養うのか。

3. 「持続可能な発展」へ、普遍価値を求めて

■ 文明の栄枯盛衰 その決定要因/水と緑と土と

■ 文明の成立要因

- ① 水と緑と土に恵まれていること。
- ② 豊富な水/河川の利水が容易であること。
- ③ 豊かな緑/森林に恵まれていること。
- ④ 肥沃な土/土壌の流失の恐れがないこと。
- ⑤ 土壌の生産力/余剰生産物を長期にわたり、安定して確保できること。
- ⑥ 地域社会の中で、非農業の生産人口が増大していくこと。

■ 文明の滅亡要因

- ① 水を失い、緑を失い、土を失った時。
- ② 天変地異/隕石/旱魃/洪水/地震・・・
- ③ 外圧の襲来/征服/民族浄化/殲滅・・・

- 文明の勃興、成立には、上記①②③④の保全/改善に一所懸命、努めながら、上記⑤⑥の基盤を整備していくこと。これが、文明の歩みを前進させ、「持続可能な開発、発展」を担保していく最大の課題である。

■ 古代4大文明がそれぞれの発祥地で勃興し、滅亡、消滅した要因は、いずれも共通している

	主な河川流域(全長:単位km)	農耕・牧畜の始まり	文明の黎明/凋落
エジプト文明	ナイル (6,690)	6,000 B.C.の頃	3,000 B.C. → 紀元前
メソポタミア文明	チグリス (1,900) ユーフラテス (2,800)	8,500 B.C.の頃	3,500 B.C. → 紀元前
インダス文明	インダス (2,900)	7,000 B.C.の頃	2,500 B.C. → 1,700 B.C.
中国文明	黄河 (5,464)	6,000~5,000 B.C.の頃 新石器時代/文化	2,700 B.C. → 1,000 A.D.
日本文明	淀川 (75)	12,000 B.C.の頃 縄文時代/文化	縄文時代/文化 → 現在に至る

■ 共生文明の安住の地/日本

- ①水と緑と土を養う水稲文化
- ②有史以来の列島改造熱
- ③水稲文明が日本人の心と精神風土を醸成。

■ 日本モデルの世界化

①「エシカルライフのすすめ」日本モデルの基本条件

- * 共生文明の安住の地。
- * 伝統的な融合型自然観。
- * 江戸期の循環型社会化の実績/3Rによる
「足るを知る文化」の醸成
- * 第1次石油危機以降、省資源/省エネの低炭素型グリーン成長の展開/3Eの
デカップリング政策
- * 「エシカルライフのすすめ」発祥の地/「もののあわれ」「わび/さび」「粹」/利他の心と
精神を崇め、善とする価値観。

②日本モデルの世界化への課題

- * 省資源/省エネの低炭素化グリーン成長のモデル化。
- * 将来世代及び国際社会への継承/発信力の強化。
- * Think Globally, Act Locallyの実践。

■地球の今、その光と陰/利他の心と精神を

①先進国の一部が謳歌している豊かで、快適で、便利な暮らしなど、その充足感や幸福感は、地球環境(地球/自然/環境)への負荷を限りなく肥大化する一方、将来世代をはじめ、途上国、とりわけ飢餓や貧困に喘ぐ“The Bottom Billion(10億人の底辺層)”など、この地球上でより多くの誰かが強いられている欠乏や脅威、苦痛や忍耐、悲惨や過酷な不幸など、多大な犠牲の上に成り立っている。この厳然たる事実を、恵まれている人々は認識し、自覚していかなければならない。

②地球の今は、常に光と陰の両面で成り立っている。

*現在、70億人に及ぶ世界人口は、38年後の2050年には90億人を超える見通しである。

*しかし、世界人口の5人に1人に相当する14億人が、1日1ドル25セント以下の生活を強いられている。

*およそ10億人が、日常的に飢餓に苦しんでいる。

*トイレなど、衛生施設のない暮らしを強いられている人々が、25億人もいる。

*世界で電気を使えないでいる人々も、15億人に及んでいる。

*気候変動が改善されない限り、これまでに確認されている全生物種のうち、3分の1以上が絶滅の危機に晒されている。

■ 先人たちの至言

① ロシアの文豪L.N.トルストイ(1828－1911)

* 他人(ひと)の不幸の上に自分の幸福を築いてはならない。他人(ひと)の幸福の中にこそ、自分の幸福もある。

② 日本の国民的童話作家/宮沢賢治(1896－1933)

世界がぜんたい幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない。

③ 元UNHCR(国連難民高等弁務官)/緒方貞子(1927－)

文化、宗教、信念がいかに異なろうとも、大切なことは苦しむ人々の命を救うことです。自分たちの国だけの平和はあり得ません。世界はお互いに支え合い、繋がっているのですから。

おわりに-究極のキーワード/エシカル認定の制度化へ向けて

- 企業評価の新潮流/ESG課題への配慮
- 社会的責任(SR: Social Responsibility)の国際規格/ISO26000シリーズの発行(2010/11)
- 投資が世界を変える/欧米のSRI(社会責任投資)熱
- 国連グローバルコンパクト(地球社会への誓約)の浸透
- 「リオ+20(2012/06)」の地球サミットでの主題。

グリーン経済の推進と「持続可能な発展」を世界の共通課題に掲げ、環境に負荷を与えずに、経済を成長、発展させることで、持続可能な発展とともに、貧富格差の是正や貧困の削減、撲滅を目指し、そのための組織的フレームワークの構築が主題であった。

■ エシカル認定の制度化へ向けて

- ① 基本は、自律的なSelf-checkを原則とする。違反者は公開する。
- ② GDPをはじめ、財務データなど、従来の数値情報を超越した評価尺度の普遍化とその認定ルールの構築。
- ③ 客観的な評価を認定する第3者機関の組織化。
- ④ 「持続可能な企業活動報告書」への反映と国際統合版づくりへの展開。